日本植民地下の台湾新文学と魯迅（上）
――その受容の概観――

中　島　利　郎

摘　要

台湾新文学雖然是在日本植民地条件下形成的，但是它没有受到日本文学的影響。它受的是中華民国発生的"文学革命"和"文学革命"以后所産生的文学創作的影響。尤其重要的是魯迅文学給台湾文学的影響。但是在日本統治下的時候，台湾作家們不能賛美魯迅的文学。

下面，擬就日本植民地時期的台湾文壇是怎様容納魯迅文学談談我的浅見。

1992年4月30日

関健詞：魯迅，台湾新文学

1．『鍾理和日記』から

1976年11月，台湾の遠行出版社から張良澤氏の編集になる「鍾理和全集」全8巻（以下「全集」と略記）が刊行された①。鍾理和（1915.12.15-1960.8.4）は，日本植民地期に大陸中国の東北および北京に渡り，日本敗戦後台湾に戻った台湾人作家である。生前はほとんど人に知られることもなかったこの不遇の作家に，満腔の追慕の意を込めて死後編集出版されたのが，この「全集」である。

この「全集」の第六巻は『鍾理和日記』で，1945年9月9日の北平（現北京，以下「北京」と記す）旅寓期より帰台後の郷里美濃でその死の8ヶ月前の1959年12月1日までの日記が収められている。その1945年10月28日の北京で書かれた条に，唯一以下のように魯迅について言及した箇所がある。

魯迅的路子――。魯迅的路子在現在是行不通的。它太激烈・太徹底了。把這法子適用於現在，那是傻子才肯做的。因為這不啻自動的斷絶了昇官發財的機會，一輩子甘願做奴隷。聰明人是不走這條路子的。

又一個魯迅的路子――。魯迅本來是學醫的，在仙臺醫専，因在課餘的電影上看見一個中國人做俄國的奸細被日本人牽去斬頭時，一陣心血來潮。遂抛下他的解剖刀與白被衣跑到文學裡去了。

他以為想要救中國捨文學無他，而它是最快的方法。

然而俗語説得好，聰明一世，懵懂一時，魯迅先生在這裡竟大大的算數錯了。他還不如去茅山，由茅山老祖借来一把斬妖劒呢．印在紙上的冷冷的字究竟是無用的，它不如向準横行白日下的妖魔鬼怪們的頚子上「嚓」一刀劈下管事。我相信只有去掉那一小部分或者是大部分的人，另一部分的人才能得救，才有法子活下去。而欲去掉那一部分的人，大概除開殺頭以外，是没有更好的辦法的。

この日記のこの条については，すでに澤井律之氏が「理和のこうした魯迅批判は，魯迅という文学者をかりて，情況のなかで苛立ちながら，文学の無力と理和自身の無力をみつめ，今一度自己にとっての文学の意義を，問うものと読むべきであろう。このことは，見方をかえれば，理和がいかに魯迅を読み，いかに影響を受けたかを示していよう。理和にとって中国の近代文学とは自己の思相と文学を形成する上で最も重要な規範であったに違いない」②と指摘しているように，魯迅の文学がいかに台湾人作家に影響を与えたかその一端をうかがうことができる。また，鍾理和は実作の面でも明らかに魯迅の小説に影響を受けた創作を発表している。たとえば彼の小説「故郷」は魯迅の同名小説「故郷」の影響のもとに書かれているのである。

鍾理和は呉濁流や鍾肇政とともに戦後，つまり日本の植民地時代以後の台湾文壇における第一世代の作家とされる。その彼が上にみるように魯迅の「影響を受けた」とされるのは，彼が初めて1938年6月に中国大陸に渡って以後，奉天（現瀋陽）に3年間，そして北京に1941年から5年間住み，創作修業をする中で，魯迅をはじめとする「文学革命」以降の作家や作品および「30年代」作家や作品から影響を受けたからだといえば，それは確かにその通りであろう。しかし，鍾理和が大陸での「文学革命」および魯迅たち新文学の作家や作品に触れたのは，大陸に渡ったのちのことではない。それらに触れる機会はすでに台湾にいた時にあったのであり，それが彼を大陸に赴かせた一伏流になっているとも考えられる。「全集」第7巻『鍾理和書簡』中に収められている1957年10月30日の廖清秀宛の書簡で鍾理和は，少年時代を回顧して，次のように述べている。

小高畢業後，入了一年半村塾攻讀古文——中文。（中略）入村塾後，閲讀能力増高，隨着閲讀範圍也増廣。擧凡在當時能够搜羅到手的舊小説，莫不廣加渉獵。後來更由高雄嘉義等地購讀新小説。當時，隔岸的大陸上正是五四之後，新文學風起雲湧，像魯迅・巴金・老舍・茅盾・郁達夫等人選集，在臺灣也可以買到。這些作品幾乎令我癈寝忘食事～

鍾理和が上のように大陸の文学に触れ，寝食を忘れて耽読したのは，16歳の時だといわれる③。当時どのようなルートを通じてどのくらい大陸の新文学作品が台湾に移入されていたかは皆目不明であるが，少なくとも16歳の少年が簡単に手にし読むことができたのだから，台湾において文学を志す，あるいは「祖国」の文学に興味を持っていた他の少年や青年もおそらくはかなり自由にこれらの作品を読んで，大陸中国で新しく生まれた文学に触発されたことは確実である。そして，かれらは当然，魯迅の文学からもその影響を蒙っていたことは

疑いない。これも，日本敗戦後の1946年（民国35年）のことであるが，この年の11月1日，台湾文化協進会発行の『台湾文化』1巻2号は，「魯迅逝世十週年特輯」を組んだ（末尾「年表」参照）。その巻頭の「記念魯迅」の中で楊雲萍は往時を回顧して次のように述べているが，これを見てもその影響が如何ようであったか推測できる。

民國十二三年前後，本省雖在日本帝國主義的宰割下，也會經掀起一時「啓蒙運動」的巨浪。而對此次運動，直接地，間接地影響最大的影響的，就是魯迅先生。他的創作如「阿Q正傳」等，早已被轉載在本省的雑誌上，他的各種批判，感想之類，没有一篇不為當時的青年所愛讀。

現在我們還記憶着我們的那時的興奮。其一原因，是因為我們當時的處境，昔另一原因，是因為當時的本省青年，多以日文為媒介，得和世界最高的文學和思想接觸，獲得相當程度的批判力和鑑賞力；所以對魯迅先生眞價，比較當時的我國國内的大部分份的人們，是比較的正確而切實的。～

以上にあげた二点の資料から，日本植民地時代において，魯迅の文学が他の新文学とともに大陸から直接に移入されていたこと，また，同時に台湾の雑誌類に転載もされ，当時の青年に愛読され最大の影響を与えたことがわかる。しかし，実際にどの作家に，あるいはどの作品にどのような形で影響を与えたか，それを具体的に検証するとなると，これは至難のことといってよい。

さて，鍾理和の日記にもう一度眼を転じてみる。先に「全集」版日記の唯一の魯迅に言及する一条を掲げたが，実はこの日記の原本にはあと二日分の魯迅についての記述があったのである。公刊されなかった部分は以下の通りである④，

1945年10月19日

今天是我們民族的戰士魯迅先生逝去九週年紀念，平市各報章莫不鄭重其事的為刊登紀念和輓吊魯迅的文章而提供了很大的篇幅。

1945年10月22日

魯迅先生的敵人增加了，戰友增加了，戰綫也延長了。但這時候他仍然發現他的老朋友那手下敗將阿Q出没於的敵方，甚至可哀地混進自己的戰綫裡，這使他好笑高興，然而也無聊——他早已不把阿Q當作唯一的戰鬪對手了。——欧陽山・魯迅主義

他常常鼓勵年輕人做種種工事……但他自己像老於提蛇的有癮的人一様，有時隨時一撈就提起一個活蹦蹦的阿Q。——同上

張良澤氏が遠行版『鍾理和日記』を公刊するにあたって，なぜ日記からこの二日分を削除したのかといえば，張氏自身から直話によれば，戒厳令下（1987年7月に解除された）の台湾で大陸の30年代左翼作家の将であり，当時国民党政府から追われていた魯迅に与する文章は国民党政府の嫌疑をかけられる恐れがあり，鍾理和の遺族のためにも，その嫌疑を忌避したかったからであるという。この日記が出版された当時台湾は戒厳令下であった。一般市民の

生活には我々の想像を絶するような極端な圧迫はなかった（ように私には思えた）が，少なくとも政治面および言論面については極端な制限があった。魯迅に関していえば，台湾で出版された中国文学史，小説史の類には「魯迅」の二文字はなかったし，大陸からのリプリント版では「魯迅」の名は墨で消されるか，削除されるか，あるいは「周樹人」に換えられるかして出版されていた。たとえば，阿英（銭杏邨）の民国26（1937）年5月上海・商務印書館版『晩清小説史』は台湾商務印書館の「人人文庫」に縮小リプリント版として収められたが，その「第十四章　翻訳小説」中の『域外小説集』と魯迅の部分はすべて削除されている。「魯迅」の二文字は戒厳令下の台湾においては禁句であったといってよかった。故に，この二日分をそのままの形で発表することは憚れたのである。しかし，この二日分は削除して公刊されたが，先にあげた一条の魯迅に関する記述が（一見すれば魯迅批判となっているため）そのままの形で発表されたということは，鍾理和の遺族および張良澤氏の両者が，国民党政府に対して当時としては出来うる限りの抵抗の姿勢を示した，極めて稀な例であったとみることができる。そして，このことはまた，当時の作家たちがいかに魯迅文学から大きな影響を受けようとも，それは正面切って公表できうるものではなく，「魯迅」の二文字は心の奥に留め置かなくてはならない性質のものであったことをも示している。これが戦後台湾文壇における魯迅の影響を不明瞭なものにしている大きな原因であることは否めない。故に，魯迅の影響を作家や作品の中にみることはなかなか困難なのである。

そして，戒厳令下ではなかったが，それによく似た情況は日本植民地下の台湾においてもあった。以下，日本植民地下での台湾における魯迅文学の受容を，次のように便宜上，三期に分けて論じていくが，記述が表面的現象面のみに終始するのは，やはり戒厳令下の台湾と同様に当時の台湾人たちの心の奥までに到達する資料の公刊がなく，いや仮にあったとしても，現在の筆者の能力ではまだ台湾作家たちの心の奥にまで踏み込むに至っていないことになる原因がある，ということを告白しておく。今後の課題である。

第一期：1923年～1931年（大正12～昭和6年）
　　大陸中国での「文学革命」が台湾に紹介されると同時に，大陸に赴いた台湾人より魯迅の作品や紹介が『台湾民報』誌上において行なわれる。

第二期：1932年～1937年（昭和7～昭和12年）
　　主に日本経由での魯迅紹介が台湾の文芸各誌で行わなわれる。

第三期：1932年～1945年（昭和12年～昭和20年）
　　以上二期は主に中国語で魯迅が紹介されるが，この期は台湾において中国語の使用が禁止され，日本語のみの使用が許される。魯迅の作品の紹介はなくなる。

2．第一期(1923年～1931年)：張我軍と蔡孝乾

1917年（民国6年）1月1日，胡適の「文学改良芻議」が『新青年』2巻5号に発表され，続く翌月1日，陳独秀の「文学革命論」が同じく『新青年』2巻6号に発表され，更に翌年の5月15日，魯迅の小説「狂人日記」が『新青年』4巻5号の発表されて，大陸中国での「文学革命」は始まった。

魯迅の「狂人日記」が発表された1918年は，台湾が日本の植民地となって23年目，日本元号では大正7年にあたる。後に台湾文学の担い手になる人々で，鍾理和(1915生)，龍瑛宗(1911生)，張文環（1909生），呉新栄(1907生)，楊雲萍（1906生），楊逵（1905生）などは，まだ幼少年期を迎えたばかりであり，張我軍（1902生），陳虚谷（1896生），頼和（1894生）など青年に達したものたちも，まだ大陸で起っている「文学革命」の何事かを知るよしもなかった。台湾にはまだ「新文学」と呼称できるようなものは何もなかった。

台湾において最初に大陸の「文学革命」を紹介したものは1923年7月15日（大正12年）発行の『台湾民報』第１巻第４号に掲載された，秀湖（許乃昌）の「中国新文学運動的過去現在和将来」である（但し，台湾においては，『台湾民報』のこの号は発売禁止になった。）⑤それは，胡適の「文学改良芻議」および陳独秀の「文学革命論」を主に，当時の大陸での新文学の情況を極めて簡単に紹介し，作家や作品についてもただ羅列したものにすぎなかった。魯迅も王統照，謝冰心などとともに小説家として名前が記されているのみである。

1925年〈大正14年〉1月1日，『台湾民報』3巻1号に初めて魯迅の作品が掲載された。以降1935年に至るまで魯迅の作品は，訳述も含めてしばしば『台湾民報』に掲載されるようになる。いま，それを一覧すれば以下のようになる。（／以降は原作の初出などを掲げた）

「鴨的喜劇」（1925.1.1『台湾民報』3＝1／1922.12『婦女雑誌』8＝1，1923.8北京・新潮社『吶喊』より転載）

「故郷」（1925.4.1-4.11『台湾民報』3＝10・11／1921.5.1『新青年』9＝2，後1923.8北京・新潮社『吶喊』）

「犠牲膜」（1925.5.1『台湾民報』3＝13／1925.3.16『語絲』週刊18，後1926.6北新書局『華蓋集』）

「狂人日記」（1925.5.21-6.1『台湾民報』3＝15.16／1918.5.15『新青年』4＝5，後1923.8北京・新潮社『吶喊』）

「魚的悲哀」（エロシェンコ作・魯迅訳1925.6.11『台湾民報』3＝17／1922.12『婦女雑誌』8＝1，後1922.7上海・商務印書館『愛羅先珂童話集』）

「狭的籠」（エロシェンコ作・魯迅訳1925.9.6-10.4『台湾民報』69-73〈通号となる〉／1921.8.1『新青年』9＝4，1922.7上海・商務印書館『愛羅先珂童話集』より転載）

「阿Q正伝」（1925.11.29-12.27，1926.1.10，1，17.2.7『台湾民報』81-85・87・88・91

第六章まで／1921.12.4-1922.2.12『晨報副刊』，1923.8北京・新潮社『吶喊』より転載）

「雑感」（1929.12.22『台湾民報』292／1925.5.8『莽原』週刊26，後1926.6北新書局『華蓋集』

「高老夫子」（1930.4.5-4.19『台湾新民報』307-309／1925.5.11『語絲』週刊26，後1926.8北新書局『彷徨』）

以上に見るように，この期の魯迅の作品の掲載はすべて『台湾民報』誌上において行なわれている。この時期の他の有力紙誌といえば1919年7月に創刊された台湾総督府発行の『台湾時報』か，東京の台湾湾青年雑誌社が発行していた『台湾』（1920年7月16日創刊の『台湾青年』が1922年4月に改題）しかなかった。ともに総合性の雑誌であり，文学誌ではない。総督府発行の『台湾時報』には，勿論魯迅の作品は発表されるはずもないが，『台湾青年』には発表されず，なぜ『台湾民報』にのみ発表されたのであろうか。『台湾青年』が日本で発行されたため魯迅の作品が発表されなかったのではないかとは，考えられない。なぜならば1923年4月15日創刊で「台湾人唯一之言論機関」と銘打った『台湾民報』も1927年7月22日までは台湾内では発行できず（発売はされていた），この時期は『台湾青年』とほぼ同様に東京で発行されていたからである（1927年8月1日発行の通巻167号に至ってやっと島内発行許可が下りる）⑥。

さらにまた，いったい誰が『台湾民報』誌上に，このように魯迅の作品を紹介掲載したのであろうか。この二点の疑問について断定はできないが，可能性の高い推測はできる。

『台湾民報』59号，60号および62号に愛羅先珂（エロシェンコ）作（胡愈之漢訳）の自叙伝「我的学校生活的一断片」が魯迅・胡愈之，汪馥泉合訳『愛羅先珂童話集』（1922.7上海・商務印書館）から転載されている。その62号の転載文完結の末尾に「一郎」という人物の「識語」が付いている。その中に「～這篇自叙傳是從魯迅・胡愈之・汪馥泉三先生合譯的『愛羅先珂童話集』轉載的。～我讀了他的文，非常受了感動，我尤其愛他的文字之優美，立意之深刻。譯筆又非常之老練，實在可為語体文的模範。我此後想多轉載幾篇，以補救漠々的我文學界。～」とある。つまりこの文から，この「識語」の著者「一郎」は「『愛羅先珂童話集』を読んで，原作および訳文に感じ入り，この自叙伝を転載し，さらにエロシェンコのいくつか転載しようとした」ことがわかる。

当時，台湾ではおそらく魯迅たちのこの訳書は見ることができなかったであろうし，また，日本でも手には入り難かったと推測される。ゆえに『台湾民報』が東京で発行されていたとしても，日本で入手した訳書から転載したとは考えにくい。となると，大陸中国でこの訳書を入手した「一郎」が，「台湾雑誌社」（東京市牛込区若松町一三八番地）か，台湾支局（台北市太平町三丁目二十八番地）に送って転載したことになる。

ところでこの「一郎」とは，「〈台湾新文学〉的先鋒」⑦といわれる「張我軍」の筆名である。

張我軍は原名は張清栄といい，1902年台北県板橋鎮の生れ。靴屋の従弟となったのち，奇縁によって新高銀行に採用され，次いで厦門の分行に転じ，そこが閉鎖された1923年の初め，厦門で知り合いになった郷友を頼って北京に赴き，北京師範大学夜間部補習班に入学した。そして，1924年の10月頃までは北京に滞在し，台北に帰った後は，台湾雑誌社（『台湾民報』を発行）の台湾支局の記者となり，その編集に携わることになるが，同時に自らも『台湾民報』2巻24号（1924.11.21）に「糟糕的台湾文学界」を，同3巻1号（1925.1.1）に「請合力拆下這座敗草叢中的舊殿堂」などの文章を発表し，大陸での「文学革命」を本格的に紹介するとともに台湾の旧態依然たる詩社を中心とした文壇を批判して「新旧文学論争」を巻き起こした。その後1925年末に台湾で最初の白話詩集『乱都之恋』を出版し，翌26年6月には再び北京に赴き，日本語塾の経営や日本語からの翻訳で生計をたてたのち北京大学に奉職した。1942年および43年には華北代表として大東亜文学者大会参加のために渡日。戦後は台湾に帰り，台湾茶葉公会秘書や台湾湾信用合作金庫の研究室主任を経て，1955年11月肺癌で死亡した⑧。

そして上に掲げた魯迅作品の転載一覧と張我軍の歴史を比較してみればわかるように，1924年末，張我軍が北京から台北に帰った前後より『台湾民報』に魯迅の作品がしばしば掲載されるようになったのである。したがって，『台湾民報』誌上の魯迅の作品や訳文は張我軍が北京より持ち帰った書籍より転載した可能性が非常に高いといえる。さてこの一覧には魯迅訳のエロシェンコの作品が二篇転載されている。「狭的籠」は1922年7月出版の上海・商務印書館『愛羅先珂童話集』より転載されたことは，この作品末尾に附された張我軍の注記からもまちがいない。注記はないが「魚的悲哀」もおそらく同書からの転載であろう。つまり，台湾雑誌社で『台湾民報』の編集に従事していた張我軍が北京から持ち帰った魯迅等訳の『愛羅先珂童話集』から，エロシェンコの作品を『台湾民報』に転載したわけだが，これは先にあげた我軍自身の「我此後想多轉載幾篇，以補救漠々的我文學界云々」という言葉にも符合する。魯迅の作品の中から魯迅その人の作品ではなくわざわざエロシエンコの作品を転載したことは一見奇異におもわれるかもしれないが，それなりの理由のあることであった。もとより先述のように魯迅の「譯筆又非常之老練，實在可為語体文的模範」という点が転載の動機としてあげられようが，さらにいえばエロシェンコのこれらの童話の内容を張我軍は是非とも台湾の人々に読んで欲しかったといえる。

「狭的籠（せまい檻）は，動物園の檻の生活を経験した虎が檻を憎み，羊をとじ込める柵やカナリアの籠などを壊して，彼らに自由を与えてやろうとするが，狭い檻の中に安住していた動物たちは，みな自由ほど不安で恐しいものはないかのように感じて出ようとはしない。虎はそれを「人間の奴隷」となじるが，その人間もまた「眼に見えぬ，（虎の）強い足でもこわすことのできないせまい檻にいれられていることを」はっきりと感じる，という内容の童話である。

また「魚的悲哀（魚の悲しみ）は，死後，霊魂は楽園に遊ぶと教えられた子鮒が，霊魂は

人間のみに与えられたもので，動物には霊魂はなく「ただ人間をよろこばせるために，人間の食物になるためにつくられた」という現実を聞いて，自ら人間につかまって解剖されるという話⑨。

エロシェンコの童話について，藤井省三氏が「幼想的世界を借りながらあらゆる抑圧から世界中の人類が解放されんことを祈るものであり，又自己解放を民衆に説く詩人が，却って民衆に恐れられ弧立させられるという予言者の悲哀をもその低音部に抱いていた」⑩と的確に評価しているが，この二作についても同様なことがいえる。そして，台湾の人々がこの作品を眼にした時には，より具体的に切実に自らがいま置かれている立場を踏まえて読んだことは十分に察せられる。虎が感じた「眼に見えぬ，強い足でもこわすことのできないせまい檻にいれられている」のは日本植民地下の台湾人自身であり，また「ただ人間をよろこばせるために，人間の食物になるためにつくられた」との言葉の「人間」を「日本」あるいな「日本統治者」に置き換えれば，抑圧されている台湾人の気持ちを代弁した叫びとして読み換えることも可能であり，このように読まれることを予期してエロシェンコのこの二作を『台湾民報』に転載したのであろう。そして，以上述べてきたことから，この二作を転載したのは，張我軍と考えて間違いがない。また魯迅自身の作品の転載についても同様であろう。この点について，更につけ加えるとすると，彼が当時としては数少ない大陸留学者で，更に数少ない文学に興味を抱くものであったこと。『台湾民報』での印陸新文学の動向紹介はほとんど彼の手で行なわれていること。そして再度北京に渡った1926年8月には直接魯迅に会い，台湾の現状を訴えたこと，等はその情況証拠となるであろう⑪。

さて，張我軍は魯迅の作品そのものを台湾に将来したが，この時期に，短文であるが，おそらく台湾においては，初めて魯迅の作品について論評を加えた一文がある。それは蔡孝乾の「中国新文学概観」という文章で，『台湾民報』3巻12号から17号（1925.4.21-6.11）に連載された。該文は，大陸の新文学を「新詩」と「新小説（戯曲も含む）」とに分けて，具体的に作品を引用しながら解説を加えたもので，当時の台湾での大陸新文学の紹介としては網羅的で，的確な論評が加えられている。魯迅の作品は「新小説」の項に「孔乙己」が引用されているが，前置きとして極めて短文ながら，まず魯迅と『吶喊』について以下のように論じている。

魯迅是個寂寞冷靜的人，他的作品完全帶着『寫實主義』的色彩。他以客觀的態度，觀察他的環境——自然界，人間，將他所看的所聞的東西，無論何等醜惡，何等卑劣，赤裸々展開給我們看。他所識的人，他的親戚，他的朋友，他自己，盡他所記憶着的部分，毫為客氣，老々實々把那些撮影出來的東西，便是他的『吶喊』。

この時期台湾において，このように的確に魯迅と『吶喊』を論じたものは他に見当たらない。そして続いて，その中の最も愛すべき作品として「孔乙己」から「孔乙己是站着喝酒而

穿長衫的唯一的人～」以下の一場面を引用し，次のような解説を加える。

這篇内中所描寫的事，並不能算是驚天動地的，就是孔乙己也是極其普通，極其平凡的人，但是我們讀之，在這極其普通，極其平凡的人事裏，却感受着一切永久的悲哀。可是我們在這個悲哀裏找到無限的人生的眞味。

像這類的作品，我們單就他的『吶喊』裏可以找出幾篇，如『白光』裏的，陳士成去投水，阿Q的槍斃，『明天』裏的單四嫂子的没有看見子兒的夢都是人間的悲哀，人生的眞味罷了。果然魯迅所描寫的完全的社會的缺陥，人生的悲哀。

孔乙己は，科挙に合格できなかった没落知識人である。その姿は哀れであるが，当時においては一般的なことであった。魯迅はそのような知識人を同情をもって描き，そして孔乙己を産みだした中国社会を憎んだ。それが蔡のいう「社会的欠陥」であり「人生的悲哀」であろう。さらに魯迅の描く民衆の孔乙己に対する嘲笑には憐愍も同情さえもない。それは魯迅の民衆に対する反発を示しており，やはりそのような民衆を産み出した社会を批判したといえる。つまり，中国の社会が変らないかぎり，このような知識人の悲哀と民衆の無恥は続くのであり，それを蔡は「却感受着一切永久的悲哀。可是我們在這個悲哀裏找到無限的人生的眞味」と評したのであろう。彼の魯迅の小説に対する理解の水準を示す一文である。

蔡孝乾という人物については，『台湾民報』に載った四・五篇の政治や文化的な論文を読んだことがあるだけで，その経歴などについては知らなかったが，最近，若林正丈氏の著書によってその為人を知ったので，以下にその略歴を簡述しておく。

蔡孝乾は1908年生れ。台湾台中彰化の人。1924年台湾文化協会の援助で上海に渡り二年間大学で学び，その年の5月に上海で成立した「台湾自治協会」に参加。また，中国社会主義青年団に加入。26年12月に帰台し，以後，左派の有力な活動家の一人となり，28年4月上海に台湾共産党が成立すると中央委員の一人に選ばれた。32年にはソヴィエト区に入り，レーニン師範学校教師や反帝同盟主任などをつとめたが，34年に開かれた中華ソヴィエト第二回代表大会では，少数民族の代表の一人として台湾代表に選ばれ大会主席団に加わった。長征にも政治部工作員として従軍，36年にエドガー・スノーが保安で会ったときは，西北ソヴィエト政府内政部長になっていたという。抗日戦争が始まると八路軍の総政治部敵軍工作部長となり，後，延安に戻り，1941年10月に開かれた東方各民族反フッショ代表大会に，蔡前の名で台湾代表として参加し，29日にはベトナム，チベット，モンゴル，回族，蘭印の代表らとともに報告を行なった。台湾「光復」後は，今度は中共台湾省工作委員会書記として台湾に秘かに戻り，地下闘争を指導したが，51年国民党当局に検挙され，後に転向した⑫。

以上に見るように，この期の台湾における魯迅文学の移入は，台湾から大陸に渡った張我軍によって『台湾民報』に作品の転載というかたちで行なわれた。また魯迅の文学をかなり的確にとらえて論評した蔡孝乾のよう人もいたが，一般的にはまだ魯迅文学の核心をとらえ

るまでには至っていないと思われる。管見のかぎりではあるが，「狂人日記」が転載されず，また『台湾民報』誌上に連載された「阿Q正伝」の転載が未完のまま終ってしまったのは，その例証といえよう。

注

(1)：張良澤編「鍾理和全集」は，第一巻『夾竹桃』，第二巻『原郷人』，第三巻『雨』，第四巻『做田』，第五巻『笠山農場』，第六巻『鍾理和日記』，第七巻『鍾理和書簡』，第八巻『鍾理和残集』からなる。なお「鍾理和の文学的核心および魯迅感について触れたものに，澤井律之「台湾の作家，鍾理和における民族意識について」（1988.12.『未名』7号）がある。

(2)：注①澤井論文。

(3)：澤井律之「鍾理和略年譜」（未公刊），鍾理和が大陸の小説を耽読したのは1930年前後，理和が16歳の頃のことであるという。

(4)：この削除部分については，1991年4月28日に行なわれた「中国文芸研究会」おいて，張良澤氏が「鍾理和文学と魯迅」と題して研究発表されたが，そのときに配付された資料によって明らかになった。

(5)：これに先立って，大陸の白話運動を紹介した，黄呈聰「論普及白話文的使命」（1923.1.1『台湾』4＝2）および黄朝琴「漢文改革論」（1923.1.1-2.1『台湾』4＝1.2）があるが，ともに白話運動を用語の面から紹介したにとどまっており，新文学紹介には立ち至ってはいない。また，大陸新文学の創作面での台湾への紹介の嚆矢となったものは『台湾民報』第1巻第1.2号（1923.4-5）に連載された胡適の「終身大事」と思われる。

(6)：『台湾民報』の創刊号の編輯人は「林呈祿」発行人は，「東京市牛込込区若松町一三八番地・黄呈聰」，発行所は同番地で「台湾雑誌社」，台湾支局は「台北市太平町三丁目二十八番地」，72号（1925.9.27）より発行所が「株式会社台湾民報社」に変り，167号は，編輯発行兼印刷人が「林呈祿」，発行所が「東京市牛込区若松町一三八番地・株式会社台湾民報社」，台湾支局は「台北市下奎府町二ノ二六」，ともに印刷も東京で行なわれた。台湾発行後については詳しくは知らないが，架蔵の景印本の396号『台湾新民報』（1930年3月29日発行の306号より改称）では，「発行編輯印刷人・林煥清」発行所は「台北市下奎府町一丁目一五〇番地・株式会社台湾新民報社」，また，架蔵原本1933年〈昭和８年〉10月1日発行の939号以降では編輯印刷発行人は変らず，発行所も同じであるが，発行所住所は「台北市末広町五ノ八」，となっている。

(7)：黄武忠『日據時代臺灣新文學作家小傳』（1980.8.10台北・時報文化出版事業有限公司）

(8)：張我軍の略歴と著作については，拙稿「張我軍について」（1989.7.1『咿啞』24.25合併号）およびその第一章末尾の注にあげた資料を参照。

(9)：高杉一郎編『ワシリイ・エロシェンコ作品集1　桃色の雲』（1974.8.25みすず書房）を参照した。

(10)：藤井省三「解説　魯迅の童話的作品群をめぐって」（1988.3.20駿河台出版社，藤井省三編『魯迅「童話」集　兎和猫』〈中国文学名作双書3＞収），なお同氏には『エロシェンコの都市――物語1920年代　東京・上海・北京』（1989.4.28みすず書房）がある。

(11)：魯迅と張我軍については，拙稿「台湾文壇における魯迅の影響（覚え書き）」（1987.3.31『台湾文学研究会会報』11.12号合併号）参照。

(12)：若林正丈著『台湾抗日運動史研究』（1987.1.1研文出版）

（待　続）

日本植民地下の台湾新文学と魯迅関係年表

【記号凡例】

・大陸での文学，政治情況　　@台湾での文学，政治情況
＊台湾での文芸・評論（含大陸の転載）　　$日本での文学，政治情況
◎台湾での魯迅作品の転載　　●台湾での魯迅についての言及

☆　☆　☆

・1917.1.1胡適「文学改良芻議」(『新青年』2＝5)
・1917.2.1陳独秀「文学革命論」(『新青年』2＝6)
・1918.5.15魯迅「狂人日記」(『新青年』4＝5，後1923.8北京・新潮社『吶喊』)
$1920〈大正9〉.12日本社会主義同盟結成。
$1921.5.28日本政府ロシア人エロシェンコを危険分子として国外追放。
・1921.10.7エロシェンコ上海到着。
・1921.12.4-22.2.12魯迅「阿Q正伝」(『晨報副刊』，後1923.8北京・新潮社『吶喊』収)
＊追風（謝春木20歳）「彼女は何処へ」(1922〈大正11〉7-10『台湾』3＝4-7
{台湾における最初の創作小説。但し，日文}

★

＊黄呈聡「論普及白話文的使命」(1923.1.1『台湾』4＝1)
＊黄朝琴「漢文改革論」(1923.1.1-2.1『台湾』4＝1・2)
{上記二論は大陸の白話運動を用語の面から紹介}
＊無知「神秘的自制島」(1923.3.10『台湾』4＝3)
{最初の中国語創作小説。}
@1923.4.15台湾雑誌社，中国語雑誌『台湾民報』創刊
@1923年初，張我軍北京へ留学
＊胡適「終身大事」(1923.4-5『台湾民報』1＝1.2)
{1919『北京導報』原題"The Grtetest Event in Laif" 1919.3.15『新青年』6＝3，1921『胡適文在』一集収}
＊秀湖（許乃昌）「中国新文学運動的過去現在和将来」(1923.7.15『台湾民報』在台湾発禁1＝4)
{胡適「文学改良芻議」，陳独秀「文学革命論」と大陸の新文学運動および作家たちを紹介。王統照，謝冰心と並んで魯迅の名もみえる。台湾で最初の大陸文学事情の紹介。}
＊張我軍「致台湾青年的一封信」(1924.4.21『台湾民報』2＝7)
@1924.5上海に「台湾自治協会」成立。成員，張深切.蔡孝乾・謝雪紅等。
◎魯迅「鴨的喜劇」(1925〈大正14〉1.1『台湾民報』3-1)
{1922.12『婦女雑誌』8＝1，後1923.8北京・新潮社『吶喊』収より転載。}
＊張我軍「請合力拆下這座敗草叢中的旧殿堂」(1925.1.1『台湾民報』3＝1)
{胡適「文学改良芻議」と陳独秀「文学革命論」の紹介し，台湾の旧態依然とした詩社を中心とした文壇を批判。}
@1925.2張我軍（23歳），北京より帰台し『台湾民報』の台湾支社の社員となる。
＊張我軍「隨感録」(1925.2.1『台湾民報』3-4)
{これ以降「隨感録」は1926.2にかけて『台湾民報』に11編掲載。またこの後，別人による「隨

感録」と題する文も発表されるようになる。}

●張我軍「研究新文学応読什麼書？」(1925.3.1『台湾民報』3＝7)

{『吶喊』,『愛羅先珂童話集』の書名を挙げる。}

・1925.3.11楊雲萍（19歳）等白話文芸誌『人人』発行

◎魯迅「故郷」(1925.4.1-4.11『台湾民報』3＝10・11)

{1921.5.1『新青年』9＝1，後1923.8北京・新潮社『吶喊』}

＊冰心女士「超人」(1925.4.21『台湾民報』3＝12)

●蔡孝乾「中国新文学概観」(1925.4.21-6.11『台湾民報」3＝12-17)

{中国新文学の本格的紹介。小説の章で魯迅「孔乙己」をとりあげる。蔡については，@1924.5を見よ。}

◎魯迅「犠牲膜」(1925.5.1『台湾民報』3＝13)

{1925.3.16『語絲』週刊18，後1926.6北新書局『華蓋集』収}

◎魯迅訳（エロシェンコ原作）「魚的悲哀」(1925.6.11『台湾民報』3＝17)

{1922.1『婦女雑誌』8＝1，後1922.7上海・商務印書館『愛羅先珂童話集』収。}

＊郭沫若「仰望（詩)」(1925.6.21『台湾民報』3＝18)

＊愛羅先珂作・胡愈之中訳「我的学校生活的一断面」(1925.7.1-26『台湾民報』59-62)

{この訳文を民報誌上に掲載したのは，張我軍。}

＊懶雲（31歳）「無題」(1925.8.26『台湾民報』67)

{頼和の最初の創作}

◎魯迅訳（エロシェンコ原作）「狭的籠」(1925.9.6-10.4『台湾民報』69-73)

{1921.8.1『新青年』9＝4，後1922.7上海・商務印書館『愛羅先珂童話集』収より転載。}

◎魯迅「阿Q正伝」(1925.11.29-12.27，1926.1.10，1.17，2.7『台湾民報』81-85・87・88・91第六章まで，『吶喊』より転載)

＄1925.16.6日本プロレタリア文芸連盟（プロ連）結成。

＊張我軍『乱都之恋』(1925.12.28台湾民報社？刊)

{台湾最初の白話詩集}

＊懶雲「闘鬧熱」(1926.1.1『台湾民報』86)

＊雲萍生「光臨」(1926.1.1『台湾民報』86)

＊懶雲「一杆『稱仔』」(1926.2.14-21『台湾民報』92・93)

@1926.6張我軍北京へ，7月台湾民報社北京駐在通信員となる。

同年8.11張我軍，「台湾民報」4冊を携え魯迅宅を訪問。

＊張資平「雪的除夕」(1927.8.14-28『台湾民報』169-171)

＊陳学昭「她的婚後」(1927.11.16『台湾民報』181)

＄1928.3.25全日本無産者芸術連盟（ナップ）結成。

@1928.4.15日本共産党台湾民族支部設立（上海，中国共産党代表者出席)。

＊胡也頻「毀滅」(1928.12.16-？『台湾民報』238-239)

＊許欽文「口約三章」(1929.1.27-2.3『台湾民報』245-246)

＄1929.2.10ナップの文学部が独立し日本プロレタリア作家同盟（ナルプ）結成。

＊張我軍「誘惑」(1929.4.7-28『台湾民報』255-258)

＊王魯彦「一個危険的人物」(1929.6.30-8.4『台湾民報』267-272)

◎魯迅「雑感」(1929.12.22『台湾民報』292)

{1925.5.8(『莽原』週刊3,後1926.6北新書局『華蓋集』収}

＊郁達夫「故事」(1930.2.15『台湾民報』300)

◎魯迅「高老天子」(1930〈昭和5〉4.5-4.19『台湾新民報』307-309)

{1925.5.11『語絲』週刊26,後1926.8北新書局『彷徨』収}

＊王白淵(30歳)『棘の道』(詩集,1931.6.1盛岡・久保書店)

{王は後,「台湾芸術研究会」に参加。その後上海に渡る。「中日戦争中,上海一体において謝(春木)らと共に地下抗日運動に従事していたところをつかまり(1912?),台湾に移送された上で終戦直前迄獄につながれていた」(戴國揮「郁達夫訪台の周辺」〈1972.5.1『中国』102〉}

＊郭沫若「岐路」(1930.11.22-12.13『台湾民報』340-343)

@1931.6.31別所孝二・平山勲・藤原泉之・王詩琅等,台北にて台湾文芸作家協会を創設。8月別所孝二編機関誌『台湾文学』を発行。全6冊,創刊号発禁。

{「ナップ」の影響のもとに結成された台・日両作家の文学団体。別所孝二:『南瀛新報』記者,明治40年(1907)8月18日生,(本籍)宮城県仙台,(住所)台北市大安十二甲413,(学歴)中学転々,(経歴)放浪十年昭和6年「南瀛新報」社入社,(趣味)文学,(嗜好)煙草〈昭和11年7月28日,国勢新聞社台湾支社刊『昭和十一年度版・台湾新聞総覧』「人物編」〉}

・九・一八満州事変

$1931.1.27日本プロレタリア文化連盟(コップ)結成

★

＊1932.1.1中国語文芸誌『南音』発行

＊甫三(頼和)「豊作」(1932.1.1-9『台湾新民報』396-397)

・1932.1.17柔石など逮捕,20日魯迅花園荘へ避難。

＊懶雲「惹事」(1932.1.17-7.25『南音』2-5.9.10)

{後出,王錦江の「頼懶雲論」で台湾における「近代短篇小説の構成の体裁を稍稍具へた」と評される。

王錦江(王詩娘)は中文作家の頼和を評して次のようにいう。「～彼は弱い者には同情し,貧しき者の惨憺たる生活を見ては嘆く人道主義者ではあるが,それも自然発生的なもので,厳格に近代的イデオロギーのカテゴリーをもって嵌めやうとすれば徒労に終るであらう。だから楊逵の『言はゞ台湾プロ文学の元老』もこの意味に於いてのみ肯ける。換言せが階級問題の必然は信じ,無産階級に同情するが,自ら飛び込んでリードして行くものではない～台湾文学は言はゞ日本文学と中国文学の交流であるが,対外の作家は両方からとも影響を受けたが,稀には一片面をより多く影響を受ける。彼はその一例で,日本文学よりは中国文学によつて育てられた。～彼は丹念な作家であるが,一つの作品を書くに先づ文言で書いた後白話文に書換え,それから台湾語に近い文章に改める」,また「惹事」について「吾々はこの作品から受ける感銘は,例へば夏目漱石の『坊っちゃん』のユーモラスと,魯迅の辛辣を稍薄くして加へたやうな味である」。〈王錦江「頼懶雲論」(1936.8『台湾時報』201)}

●擎雲「文芸時評・關於魯迅的消息」(1932〈昭和7〉2.1中国語雑誌『南音』1-2)

{昭和7年1月号『中央公論』所載,佐藤春夫「故郷」,解説「原作者に関する小記」に拠って執筆}。

◎魯迅訳(エロシェンコ原作)「池邊」(1932.3.14『南音』1＝5)

{1921.9.24-26『晨報副刊』，後1922.7上海・商務印書館『愛羅先珂童話集』収。}

＊1932.4『台湾新民報』日刊となる。未見ではあるが，四月以降，大陸の小説では，老舎「二馬」，評論では清池生「文学の階級的意義」，呉耀輝「プロ文学我観」，徐瓊二「失業者文学」，同「台湾プロ文学運動の方向について，重大な大衆化問題」などが掲載された（劉捷「台湾文学の鳥瞰」〈1934.11.5『台湾文芸』1＝1〉）。

＊楊逵（27歳）「新聞配達夫」（1932.5.19-27『台湾新民報』，前編のみ）

◎魯迅「魯迅自叙伝略」（1932.9.27『南音』1＝11）

{1925.6.15『語絲』週刊31「ロシア語訳『阿Q正伝』序および著者自叙伝略」の「自叙伝略」部分。1935.5『集外集』収。}

@1933.3.20東京にて台湾芸術研究会成立。

{大陸及び日本の左翼文学の影響を受けて留日台湾学生，蘇維熊・張文環（22歳）・王日淵・劉捷（郭天留）・呉坤煌等が設立}

$1933.3.27日本国際連盟を脱退。

@1933.7.15東京にて台湾芸術研究会機関誌『フオルモサ』創刊。

@1933.10.25台北にて台湾文芸協会成立。

◎魯迅「無題」詩〈上海新夜報所載民生疾苦詩選〉より転載（1933.12.30『フオルモサ』2）

{1933.4.1『現代』2-6「為了忘却的記念」中の七言律詩「慣於長夜過春時～」，後1934.3上海・同文書店『南腔北調集』収}

＊蔡嵩林「郭沫若先生訪問記」（1934.7.15『先発部隊』）

{対話中に郁達夫，魯迅の名が出る。}

$1934.2.22ナルプ解体。

@1934.5.6張深切・頼明弘等の提唱で第一回全島文芸大会を台中にて挙行。台湾文芸連盟結成。

＊呉希聖「豚」（1934.6.15『フオルモサ』3）

@1934.7.15台湾文芸協会，白話文芸誌『先発部隊』発刊（一号のみ）

＊楊逵「新聞配達夫」（1934.10ナウカ社『文学評論』1＝8）

{「この雑誌刊行の当初の目的は，ナルプ解体という新しい直面して，それまでのプロレタリア文学運動の主流として君臨していた小林多喜二流の論理を再吟味し，またつとに林房雄らによって提起されていた従来の正当プロレタリア文学運動のおちいった政治主義的偏向にたいして政治から文学へという主張の正当性を検討するという姿で，それ自体をみずからの役割として創刊～」（佐藤勝「「文学評論」〈昭和52.11.18日本近代文学館編『日本近代文学事典・第五巻』）}

@1934.11.5台湾文芸連盟機関誌（日・中両文）『台湾文芸』発行。

●増田渉著，頑鋏訳「魯迅伝1」（1934.12.18『台湾文芸』2-1）

{『改造』四月号掲載。この号の「編輯後記」に「魯迅は中国に於ける偉大なる作家で彼の伝記は中国文学史の重要な部分となっている」とある。}

@1935.1.6台湾文芸協会誌『第一線』発刊（日本政府の要請で日文原稿掲載，一号のみ）

＊王錦江「夜雨」（1935.1.6『第一線』）

●黄得時（24歳）「小説的人物描写」（1935.1.6『第一線』）

{「外面描写」の項に魯迅訳「工人綏恵略夫（シェヴイリヨフ）」を，「内面描写」に「阿Q正伝」を引用使用。}

＊呂赫若「牛車」(1935.1ナウカ社『文学評論』2＝1)
＊張文環「父の顔」(1935.1『中央公論』一月号，佳作入選)
●増田渉著，頑銕訳「魯迅伝2」(1935.2.1『台湾文芸』2-2)
●郭沫若「魯迅迅伝中的誤謬」(1935.2.1『台湾文芸』2-2)
＊頼明弘「郭沫若先生的信」(1935.2.1『台湾文芸』2-2)
＊頼明弘「訪問郭沫若先生」(1935.2.1『台湾文芸』2-2)
●増田渉著，頑銕訳「魯迅伝3」(1935.3.5『台湾文芸』2-3)
●増田渉「『魯迅伝』についての言分」〈日文〉(1935.3.5『台湾文芸』2-3)
●増田渉著，頑銕訳「魯迅伝4」(1935.4.1『台湾文芸』2-4)
{この題の「編輯後記」に「問題となった魯迅伝は本号で終りです。郭沫若先生の水落石出的原稿を与せられんことを読者から希望して居ります」とあるが，なかった。}
＊森次勲著・頼明弘訳「中国文壇的近況」(1935.5.5『台湾文芸』2-5)
{原載『文芸』四月号，原題「支那文壇のこの頃」}
＊蔡嵩林「中国文学的近況」(1935.5.5『台湾文芸』2-7)
＊魏晉「最近中国文壇上的大衆語」(1935.5.5『台湾文芸』2-7)
＊黄得時「読郭沫若先生著『屈原』(1935.8.4『台湾文芸』2-8・9)
@1935.12.28楊貴主編『台湾新文学』発刊。
＊頼和「豊作」，楊逵邦訳で『文学案内』2＝1に掲載。
{『文学案内』は貴司山治主編，旧ナルプ系雑誌。}
＊1936.1.24，阿Q之弟（徐坤泉）興南新聞社？から通俗小説『可愛的仇人』を出版（中国語）
●「消息通」(1936.8.5『台湾新文学』1＝7，補白)
{中国著名的進歩的作家魯迅，矛（ママ）盾，胡風，丘東平，孟東還，黎烈文，等為提強進歩的文学反対法西斯的文化反動，組織文化聯合戦線同盟会網羅全中国進歩的作家開始了活動。→「中国文学工作者宣言」}
・1936.10.19魯迅逝去
●王詩琅「髭魯迅を悼む」(1936.11.15『台湾新文学』1-9，日文)
●黄得時「大文豪魯迅逝く」(1936.11.15『台湾新文学』1-9，日文)
＊郁達夫12月22日朝日丸にて来台。
●尚未央「会郁達夫記」(1937.1.31『台湾新文学』2＝2)
{尚未央が前年『文学』11月号に発表した「懐魯迅」について郁に感想を述べる。この号の「編輯後記」に「国宝的待遇の郁達夫氏走馬灯的観方で僅か一週間で台湾を去る。われわれの文学にも課甚の注意を払ってゐると言はれる。これを機縁に台湾の文学がもっと隣国に紹介されれば幸である」(王錦江）とある。}
{また，同「編集後記」には「天下の大阪朝日新聞が今回新たに南島文芸欄を創設し云々～」という語が見える。}
＊「年頭放言的小集」(1937.1.31『台湾新文学』2＝2)
{徐坤泉に郭秋生が「阿Q之弟」という筆名の由来をたずねている}

★

@1937.4.1　日本政府，台湾発行の出版物に中国語の使用禁止令。
＊龍瑛宗「パパイヤのある街」(1937.4『改造』19＝4)

＊1937．4．20，徐坤泉『暗礁』台湾新民報社（中国語）
＊1937．6．12徐坤泉『霊肉之道』台湾民報社（中国語）
・1937．7．7　日中戦争始まる。
＊1937.10.16阿Q之弟「新孟母」を『風月報』に連載開始（中国語）
@1938．6鍾理和（23歳）満州へ。（1946．3．29帰国）
@1940．1．1西川満等，台湾文芸家協会を設立し，機関誌『文芸台湾』を発行。
@1941．4．19皇民奉公会成立。
@1941．5．27台湾文芸家協会を離脱した張文環等『台湾文学』を発行。
＊周金波「志願兵」（1941．9．20『文芸台湾』２＝６）
$1941.12．8日本海軍，真珠湾を攻撃。
@1942．4．1陸軍特別志願兵制実施。
＊1942．5．15老徐（徐坤泉）「滄海桑田」を『南方』に連載開始（中国語）。
●黄得時「輓近の台湾文学運動史」（1942.10.19『台湾文学』２＝４）
$1942.11．3大東亜文学者大会開催。（西川満・濱田隼雄・龍瑛宗・張文環参加）
@1943．1．31頼和逝去。
●楊雲萍「頼和氏追憶」（1943．4．5『民俗台湾』３＝４）
＊守愚「小説と懶雲」（1943．4．28『台湾文学』３＝２）
＊陳火泉「道」（1943．7．1『台湾文学』６＝３）
@1943．7．1海軍特別志願兵制実施。
$1943．8．25第二回大東亜文学者大会開催。（斎藤勇・楊雲萍・周金波参加）
●龍瑛宗「二つの『狂人日記』」〈昭和15.10執筆〉（1943〈昭和18〉12.11盛興出版部，龍瑛宗『弧獨な蠹魚』収，台湾文庫４）
{初出は「文芸首都」８-10（1940.12）}
●楊逵「頼和先生を憶う」（1943．4．28『台湾文学』３＝２）
＊張冬芳日文訳，老舎「離婚」（1943．7．31『台湾文学』３＝３）翻訳掲載始まる，一回のみで中断。
@1943年末までに『文芸台湾』，『台湾文学』相次いで停刊。
@1944．5．1台湾文学奉公会『台湾文芸』を発行，12月まで８冊。
@1944．9．24徴兵制実施。

☆

『台湾文化』１-２（1946.11．1〈中華民国35〉台湾文化協進会）
●　「魯迅逝世十週年特輯」
楊雲萍：記念魯迅
許寿裳：魯迅的精神
高歌訳：斯茱特萊記魯迅
陳烟橋：魯迅先生与中国新興木刻芸術
田漢：漫憶魯迅先生
黄栄燦：他是中国的第一位新思想家
雷石榆：在台湾首次紀念魯迅先生感言
謝似顔：魯迅旧詩録
$1969．1関西大学院生張良澤，上野恵司と魯迅「中国小説的歴史変遷」をＰＲ誌『大安』に連載。帰台後

の逮捕を考慮して「河上清」の変名を使用。

@1970.9張良澤帰台後，成功大学中文系の講師になり，魯迅の作品を講義するも，特務学生の密告により中止。

『鍾理和日記』(1976.11台湾・遠行出版社刊，張良澤編「鍾理和全集」巻⑥)

1945〈民国34〉.10.19及び10.22の頃：魯迅の記載削除

同上日記，張良澤手抄本には魯迅の記載あり

『鍾理和書簡』(1976.11台湾・遠行出版社刊，張良澤編「鍾理和全集」巻⑦

1957〈民国46〉.10.24の廖清秀宛書簡で鍾理和は，公学校高等科を卒業してのち村の塾に入ったが，その頃魯迅，巴金，老舎，茅盾，郁達夫等の選集を高雄や嘉義から取寄せて読んだとある。(沢井律之「鍾理和略年譜」(未公刊)によれば，鍾理和16歳の頃〈1930年〉のことだという。〉

☆ ☆ ☆

主な年表作製参考文献(上記に注記した以外の文献)

塚本照和「台湾文学年表(試稿)・旧日本植民地時代(1895-1945)」(1981.11『南方文化』〈天理大学〉8)

張良澤輯「徐坤泉(阿Q之弟)作品目録」(1987.11.10台湾学術研究会『台湾学術研究会誌』2)

東方文化書局有限公司復刻「台湾新文学雑誌叢刊」全17巻(民国70.3)

私家版「台湾新文学雑誌叢刊総目録・附人名索引」

※本稿は聖徳学園岐阜教育大学1991年度研究助成金の成果の一部である。